

2017年度 第19回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

～ あしたに向かって～



公益財団法人

愛恵福祉支援財団

2017 年度 第 19 回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

～あしたに向かって～

公益財団法人

愛恵福祉支援財団

大いなる 輝きと苦しみの渦は
あなたを捉え
叫びの中
腕をのばそうと
何もつかめず 何も見えない

しかしそのただ中ですら
身体には かこといまとみらいの
愛と守りが満ち
光の化身は
静かにあなたの手をとる
あなたは
必ず

至るだろう

彼方へ

“豊かな福祉社会を創るために”
～あしたに向かって～

「理事長のこぼれ」…………… (4)

■学生の部

〔最優秀賞〕

・被災地に立って感じたこと…………… 安田 美結 (6)

〔優秀賞〕

・「愛」…………… 上之段 翼 (9)

・信号という障害、みんなに優しい豊かな社会を目指して …… 岡本あすか (12)

・私と叔父のコミュニケーション…………… 水嶋恵利那 (15)

・私達の未来…………… 内田 桃代 (18)

〔佳作〕

・豊かな福祉社会は私たちがつくりだすもの…………… 森山ひかる (21)

・「福祉」をより近くに、

よりつながりのあるものにするために…………… 田島 瑞生 (25)

・様々なボランティアから得たもの…………… 廣瀬 花音 (28)

・豊かな福祉社会のために…………… 林 萌花 (31)

〔奨励賞〕

・福祉を学習して…………… 尾嶋 誠 (34)

■専門職の部

〔最優秀賞〕

・障害者の共生社会のための環境を叶えて！…………… 堀江 敦子 (38)

〔優秀賞〕

・私にできること…………… 相澤美智子 (41)

〔佳作〕

・介護者支援の強化…………… 中野 雄介 (44)

・ホームレス支援の現場から福祉社会を考える…………… 平田 真基 (47)

■一般の部

〔最優秀賞〕

・九十九髪（つくもがみ）、心眼のピアニスト …… 丸山有加里 (51)

〔優秀賞〕

・人 間 杖…………… 近藤 和子 (55)

・人生の下山を目指す…………… 矢矧 秀司 (59)

〔佳作〕

・家族で乗り越える…………… 一柳 博之 (62)

・支援の輪を広げよう…………… 召田 俊雄 (65)

※作品において用語が統一されていませんが原文を尊重しました。

あとがき…………… (71)

ごあいさつ

公益財団法人 愛恵福祉支援財団

理事長 高原 敏夫

「豊かな福祉社会を創るために」をテーマとしてエッセイを公募しはじめて今年度は19回になりました。

誰もが「当たりまえに生きられる社会を。」とのフレーズもかなり一般化してきました。

国民生活おいてなくてはならない社会福祉活動が、国民各層どのように認識され、支持されていることかをエッセイにまとめ助け合う、支え合あった体験、創り出した経験や意見など多くの投稿をいただきました。

2017年も豪雪、豪雨、火山噴火などの自然災害が頻繁に発生し高齢者家族、障がいを持つ家族などが難民化してしまった様子を見せつけられました。

しかし多様な体験をもとに寄せられた作品からは、AI（人工知能）、ICT（情報通信技術）が発達した今日の便利さの裏側にある不自由さ、高齢者施設不足、老老介護、介護難民、人材不足など優先すべき課題の掘り起し、安心して暮らせる地域づくり、在宅介護者の実情と行政的支援の必要性など、また支援を必要としている人に適切な情報が届くような世の中にする事など「共生社会」への実践、「他者への共感」する生活の中での福祉意識が育っている実情を読み取ることができます。

社会の現状は少子、高齢、超高齢社会として有りつづけるなかで、誰もが「当たり前」に生きられる」ために課題としていることに心強くいたしました。

最後に「愛恵エッセイ」公募を御指導された故濱野一郎理事長に感謝を申し上げます。

2018年2月

学 生 の 部

■最優秀賞

被災地に立って感じたこと…………… 安田 美結

■優秀賞

愛…………… 上之段 翼

信号という障害、みんなに優しい豊かな社会を目指して…………… 岡本あすか

私と叔父のコミュニケーション…………… 水嶋恵利那

私たちの未来…………… 内田 桃代

■佳作

豊かな福祉社会は私たちがつくりだすもの…………… 森山ひかる

「福祉」をより近くに、

よりつながりのあるものにするために…………… 田島 瑞生

様々なボランティアから得たもの…………… 廣瀬 花音

豊かな福祉社会のために…………… 林 萌花

■奨励賞

福祉を学習して…………… 尾嶋 誠

■ 最優秀賞

被災地に立って感じたこと

安田 美結

昨年の八月三十日に、台風十号が東北と北海道に上陸しました。昭和二十六年に気象庁が統計を取り始めて以来、初めて東北地方の太平洋側に上陸した台風だそうです。

私のおじいちゃんは、被害があった岩手県の岩泉町に住んでいます。今年のお盆におじいちゃんに会いに岩手県に行って、初めてどんなに被害が大きかったかが解りました。おじいちゃんの家は山間部の谷間にあるので、山が崩れて土砂や水や根っこが付いたままの木が一気に家を直撃しました。家は天井に届くぐらい泥でいっぱいになって、道路は崩れて半分以上が無くなっていたり、ひび割れて土が剥き出しになっていました。木が流されてきたまま残っていて、ガードレールや流されてきた車は潰れて形が変わったまま転がっていました。民家は基礎が流されて斜めに傾いて今にも崩れてきそうになっているところもあり、近所の人々が亡くなっていました。私はこの悲惨な景色を見て、ここにいた人達はどんなに怖い思いをしたのか、どんなに大変で悲しい思いをしたのかと思いました。明るい時間にこの光景を見た時は、余りにも変わり果てていて驚きました。

私のおじいちゃんは、半身が麻痺している状態で一人暮らしをしています。毎日ヘルパーさんが来ないと、料理と排泄の片づけと洗濯と掃除が出来ません。デイサービスを利用しないと、お風呂に入れないし麻痺した左手足のリハビリが出来ません。つまりおじいちゃんは、福祉サービスを利用しなければ、生きてはいけないので

す。しかし、台風十号の被害で利用していた福祉施設は、死者が何人も出る程の大きな被害を受けました。おじいちゃんの家までくる道の途中は、いくつも道路が無くなり、車が通行止めになり福祉車両が来れなくなりました。

おじいちゃんが暮らしている地域は過疎地域です。住んでいる人の殆どが高齢者で若者はいません。近くにはスーパーがないので、遠くまで行かないと買い物をする事が出来ません。病院や銀行や郵便局などの公共施設も近くにはありません。小学校も徒歩で一時間かかります。私のお母さんは毎日そこを歩いて通ったそうです。街灯もないので夜は真っ暗闇になって怖かったそうです。人が少ないので、一人暮らしで家から出られないおじいちゃんは、ヘルパーさんが来なければ一日誰ともしゃべらない日もあります。

私は過疎地域は、人の助けが多く必要な地域だと思います。例えばスーパーが近くになくても移動販売があれば遠くまで買い物に行かなくて済みます。福祉車両があれば、おじいちゃんのように色々なサービスを受けることができます。高齢化が進んだ過疎地域では、このような助けが沢山必要です。

反対に過疎地域にも良い所があります。おじいちゃんの命は地域の方のお蔭で救われました。台風の日、おじいちゃんは鉄砲水に流されて、泥の中から動く方の手と足を使って這い出し道路で一晩過ごしました。おじいちゃんのことを心配した地域の人達が、命綱をつなぎあって危険を顧みず助けに来てくれ、弱っていたおじいちゃんを自衛隊のヘリコプターに乗せて病院まで運んでくれました。自分達も避難しなければならないのに、おじいちゃんを助けるまでは自分達もここに残ると言って、自分の家族のように心配してくれました。普段からおじいちゃんのことを気にかけていないと絶対でき

ないことだと思います。おじいちゃんの地域には、強い絆があるのだと感じました。入院したおじいちゃんは、「家に帰りたい。地域の皆も心配だ。」と言いました。きっと早く地域の方に会いたいという思いが強かったんだと思います。

退院したおじいちゃんは、お母さんの兄弟の家に仮住まいをさせてもらっていましたが、「家に帰りたい。」と強く言っていたので、おじいちゃんが戻れるように皆で考えることになりました。元々住んでいた家は、土砂や泥や木材でいっぱいだったので、ボランティアの方に協力してもらい、家の取り壊しが行われました。奇跡的に残っていた作業小屋に住めるようにお母さんの兄弟やおじいちゃんの兄弟の大工さんが協力してくれ、おじいちゃんは今その作業小屋に住んでいます。沢山の人の小さな力が集まったからこんなことが実現したんだと思います。県外からも沢山ボランティアの人が来てくれて助けてくれました。感謝の気持ちでいっぱいです。

過疎地域には、住んでみないとわからない人々の温かさがあると私は思っています。

(上田市立真田中学校)

愛

上之段 翼

僕の父は15年間透析をしていて、8年前に死体腎移植を行った。今も身体障害者1級の手帳を持っている。以前、父は透析をしているだけで仕事においても世間からもかなり苦労した。僕が思うに、世の中すべての人が、障害者を一人の人間として認め受け入れてさえくればどんなに未来は明るいだろうかと思う。

父は27歳頃から透析をしていた。仕事においても週に3回病院で透析を行わなくてはならず、勤務時間短縮、仕事において遠方に出張できないため、会社でのデスクワークが主になったと言う。会社に行っても仕事を自分で探さないといけない。ある時は、掃除、運転手。社会の受け入れはきびしかったと言う。

母は看護師だ。父と病院で知り合い結婚した。結婚する時は、外部の猛反対だったらしい。「あんたは障害者なんだから、普通のひとと結婚なんか望んだらだめだ。」「君は障害者なんだから絶対に離婚する。」「普通の人があんたみたいなひとと結婚するはずがない。騙されとる。」「なんで相談してくれなかったんだ。いい人紹介するのに。」人間が言うべき言葉ではないと僕は思う。人間は、みんな意味があって生まれてきた。人を愛し愛されるために。それなのに、障害者というだけで、奪われるものが多すぎるような気がする。それは、人間が奪っているのだと思う。みんなが、認め受け入れてさえくれば、どんなに平和かとも思う。

父と母は、世間の猛反対の中結婚した。父の家族は結婚式の日に

号泣だった。母の家族は本当に素晴らしいと思う。母の両親も最初は結婚に猛反対だった。ところが、母の兄姉が「目で見えるもの、耳で聞くことだけで判断するなんておかしい。心を見てあげて。」と言ったという。母の両親はしばらく冷静に考えたという。

「ごめんね。つい感情的になってしまって。傷つけてしまい本当にごめんね。これからは二人が足りない所を補い合って幸せになるのよ。」と父と母に言っただけ。父は、母のことが本当に大好きだった。母も同様だ。母に「お父さんとの結婚で反対されてどうだった？」と聞くと母は「病気というのは気にならないと言えばウソだけど病気というものの以上にお父さんの心が素敵だった。それに、私にはお父さんの優しさが必要だったし、お父さんを尊敬していた。」と言っていた。きっと父も同様だったに違いない。人は、一人では決して生きていけない。漢字の「人」からも分かるようにお互いが支え合っている。一人では出来なくとも、二人ならきっとどんなことでも乗り越えられるに違いないと父と母は思ったに違いない。

父と母が結婚して姉が生まれ僕が生まれた。父はとても僕たちを愛し育ててくれた。父は僕たちのために、透析を病院から在宅透析に切り替えた。僕たちは父が在宅透析をしている環境で育った。父が家で透析をし始めた時僕は確か2歳、姉は4歳だった。父の膝の上で絵本を読んだり、テレビを見たりしたのを写真で見て懐かしと思う。確か保育園の年長の運動会の時、父の蛇のような左手のシャントを見て、周りの大人の人们がジロジロ見ながらコソコソと話していたのを覚えている。「なんなのかしら。気持ち悪いわね。」と周りの人が言っていたが父は隠すことなく強かった。「僕は透析をしているもので。治療に必要なんですよ。」と笑いながら言っていた。父は、きちんと周りの人に説明していたのだった。父も母もよく言っ

ていた。「知らないだけなのかも。きちんと説明すれば理解してくれるはずよ。」と。周りの人も説明を聞くと「そうだったんですね。大変ですね。」と言うのが大半だ。

僕が7歳の頃、弟が生まれた。父の在宅透析も板につき、仕事時間も大分都合がつくようになり、一生懸命過ごしていた。きっと一生懸命に生きてきた姿が自然と周りに浸透したのか、それとも、私達家族が父を障害者とは全く意識してなかったからか、周囲の人たちは温かく私達家族を見守っていてくれ、応援してくれた。

答は一つ。認め受け入れること。そしてそれが愛することなんだと思う。『愛』という漢字は「心から受け入れること」。姉が教えてくれた。

弟が1歳を迎えようとした春に死体腎移植を父は行った。移植を終え8年が過ぎようとしている。透析からは解放され、仕事も透析する前のように出張の毎日だ。僕たちの生活は何の変わりもない生活だ。僕たち3人の姉弟は自信を持って言える。「認め受け入れる。」一人一人がすべて愛を持って行う時、明るい未来はもっと素晴らしい奇跡をも起こすに違いないと僕は思う。

(高松市立桜町中学校)

■ 優秀賞

信号という障害、 みんなに優しい豊かな社会を目指して

岡本 あすか

「あっ、、、」

歩く姿が何だか少し不安げに見えて、思わず目で追った。何気ない光景が、私にとっての大事件だったのは、彼女が赤信号で横断歩道を渡り始めたからである。よく見ると右手に白杖を持ち、黄色いブロックを頼りに歩いているようだった。以前、視覚に不自由がある方は、聴覚が優れていることが多いと聞いたことがある。彼らにとって、音があって、点字ブロックがあって、見えない世界の中にも生きる上で助けになるものは少なからずあるのだろう。けれども、人間が自分達のために作った「便利」なシステムが、時に障害となり、不自由さを生むこともある。

一般的に、私達が横断歩道を渡る際、同じ方向の車用信号も青色を示す。故に、車が進む音というのは、私達と同じ方向に向かって聞こえるということだ。自分が進みたい方向に向かって立ち、車の音が背後から迫るように聞こえ、進行方向へ遠ざかって行けば、進みたい方向の信号は高確率で青のはずである。

「歩車分離式信号」をご存じだろうか。片方の信号が青なら、もう片方は赤を示し、歩行者と自動車は決して同時に動かない仕組みになっている。歩行者と自動車の接触を減らすことで、交通事故を防ごうという目的がある。だが、この場合、例えば車の進む音が聞こえたとしても、歩行者用信号は赤。つまり、止まれである。先程述

べた信号の原理とは、全く逆の現象が起こる。車の音が聞こえたならば、進んではいけない。そこにある信号が、歩車分離式か否かは、目で見て判断するしかない。盲目の彼女が渡った信号は、そう。「歩車分離式信号」だった。どうすれば、それを知らせることが出来たのだろうか。

視覚に何らかの不自由があり、聴覚は機能していると仮定すると、鍵となるものは「音」である。確かに、歩車分離式信号によって、事故軽減という目標は達成出来たのかもしれないが、一部の人の間では、かえって増加しかねない。そこで、近くに音声で情報を伝えられる機械を置くのはどうだろう。「歩行者用信号が青になりました。」「赤に変わります。」これだけでも、減らせる危険は充分あるに違いない。けれども、これが有るところ、無いところと地域によって差が生まれてはいけない。導入するからには、どこにでもあって、誰もが安心して歩ける社会である必要がある。世の中を便利にするシステムを作るときは、必ずそこでおくる問題も同時に考え、対処していかなければならない。

都会と言われる場所では、あちらこちらにコンビニエンスストアがあり、好きな時に好きな物が簡単に手に入る。「随分便利になったなあ。」という声を聞くことも増えた。便利になったその街の影で、不便になったと助けを求める者はいないか。この社会を、全ての人が豊かであると感じられるようにするためには、不自由がある人の目線で考えていかなければならない。100%をわかることが出来なくても、目を瞑って、耳を閉ざして、心を寄せてみれば良い。そうして初めて、私達は、この世界の隠れた不便さをほんの少しだけ知るのだろうか。

怪我や急激に進む高齢化により、リハビリをして、出来る限り少

ない不自由で家に帰ろうと懸命に取り組む人がいる。家族や友人、ヘルパーや医療従事者に助けられて生きる人もいる。このような人達にとって、駅や古い集合住宅の高い階段が、どれほどの障壁になってしまうかを想像することは、容易いことである。高い位置にあるエレベーターの押しボタンには、車椅子に座ったままでは届かない。

私達ひとりひとりに苦手なことがあるように、現在の社会で生きることの難しさを感じている人々を、元気な私達が減らしていかなければならない。障害を持つ方、高齢者の人権を尊重した上で、その人達が望む生き方を自由に選択出来る世の中になれば、福祉社会としての充実度も高まり、笑顔溢れる世界も創っていける。そんな気がする。

明日はすぐ来る。その場足踏みをしている時間はない。今後の社会を支える若者を中心に、想像することで誰もが生きやすい、みんなにとって「便利」で豊かな社会を創造していこう。

(武庫川女子大学)

■ 優秀賞

私と叔父のコミュニケーション

水嶋恵利那

叔父は、私が部屋でテレビを見ていると、部屋のドアを勢いよく開け、唸り声を上げながら入ってくる。テレビのリモコンを手に取り、チャンネルを何度も変えて、最後にテレビの音量を最大にする。私がリモコンを取り上げようとする、私をじろっと見つめた後、ぼいっとリモコンを手放して部屋を出ていく。

これが、私と叔父の、唯一にして最大のコミュニケーションである。

私には、重度の知的障害を持った叔父がいる。しゃべることもできない、人とコミュニケーションをとることもほとんどできない。いつも唸り声を上げながら、ひたすら新聞を裂いたりしている。そんな叔父は普段、障害者支援施設で生活をしているが、定期的に祖父と祖母の暮らす家に帰ってくる。祖父と祖母の家と私の家は近く、私は自分の家と同じようにその家に入出入りしている。家に叔父がいる日は、壁を一つ隔てた隣の部屋で、なるべく叔父と接触しないように過ごすのだった。小さい頃、家で奇声を上げながら暴れる叔父を、まるで得体の知れないおばけのように思っていた。飲んでいてジュースを取り上げられて全部飲まれてしまい泣いたこともある。しかし、なにより怖かったのは、叔父にふいにじっと見つめられることがあることだった。私の部屋にテレビのチャンネルをいじりにくるときもそうである。睨んでいるような、笑っているような、そんな何を訴えられているのかわからない視線で私を凝視するので

ある。叔父は何を考え感じているのかが、さっぱりわからない。気になって部屋を出て行った叔父を見に行くと、また淡々と新聞を裂いているのであった。叔父は本当に生きていて幸せなのか？そんなことを考えてしまうことも度々あった。

私は叔父との距離を図りかねたまま上京し、叔父と会う頻度も少なくなった。そんな生活の中でも、ふと叔父のことを思い出していた。久しぶりに実家に帰り、祖母と話していると、叔父の話題になった。

「あの子は、あと 10 年も早く産まれていたら、そのまま助からなかったのに」

そう呟く祖母の目は、穏やかな中にも憂いを帯びていた。祖母のお腹から出てくるとき、叔父はいつまでも産声を上げなかったのだという。そして、叔父は様々なハンデを背負って生きることになった。祖母の言葉から、まだ福祉の考え方が今ほど理解されていなかった時代の田舎で、ハンデを負いすぎた人が生きていくこと、その人を支えて生きていくことがいかに悩ましく大変だったかがうかがえた。

その祖母の言葉を聞いて、もし叔父が健常者に生まれていたら、という想像が頭をよぎった。どんな言葉を交わしただろうか。私の名前を呼んでくれただろうか、私を可愛がってくれただろうか。そんなことを考えていたら、自然と涙が出ていた。私は、家族である叔父と仲良くできないことが歯がゆかっただけなのかもしれない、そう思った。

それから何度か叔父に会った。相変わらず、叔父は私の部屋に来る。そこでひとつ、気づいたことがある。叔父がテレビのチャンネルをいじった後などに、じっと私を見るあの顔は、彼なりに「ニヤリ」としているようなのだ。私の見ている番組を変えてやり、その

上音量を最大にしてうるさくしてやり、私の困った顔を見て「ニヤリ」とする。それはまるで子供のいたずらだ。この些細ないたずらは、私だけでなく、叔父にとっては私との唯一のコミュニケーションなのかもしれない。叔父は、どこにでもいる、ただの大きくなってしまった姪っ子にちょっかいを出したい叔父さん、なのだ。

私は、この叔父とのやり取りを続けていこうと思った。他に叔父と心を通わせる方法を探してみたが、結局、この叔父のちょっかいに懲りずに相手をするのが、あしたの、未来の私たちの距離を近づけてくれると考えたのだ。先日、部屋にきた叔父に新聞を渡してみた。叔父は、いつもより大きく唸って部屋を飛び出していった。それが「とても嬉しい」ということなのだと、私にはわかった。

福祉とは、豊かさや幸せを表す言葉だという。何を幸せや豊かさとするかは、その人によって違うはずだ。言葉が話せて、みんなと同じ生活することだけが幸せではないし、言葉を使い語り合うことだけが豊かなコミュニケーションなのではない。たった数分の、人から見たら心配してしまうようなやり取りが、健常者と障害者、叔父と姪、そんな二人の大事なコミュニケーションだったりするのだ。

叔父は、私が部屋でテレビを見ていると、部屋のドアを勢いよく開け、唸り声を上げながら入ってくる。テレビのリモコンを手に取り、チャンネルを何度も変えて、最後にテレビの音量を最大にする。私がリモコンを取り上げようとする、ニヤリと私を見た後、ぽいっとリモコンを手放して満足そうに部屋を出ていく。

これが、私と叔父の、ささやかにして最大の、大事な大事なコミュニケーションである。

(日本大学藝術学部)

私達の未来

内田 桃代

私は、児童養護施設で暮らしています。3歳の時に姉と二人の兄と弟と入所しました。その時の事はあまり覚えていませんが、いつの間にか母が居なくなっていて大泣きしたことは良く覚えています。ですが、私の母と父の代わりに施設の先生が面倒をみてくれました。弟は回りからすごく可愛がられていましたが、私は静かな子だったと、先生から聞きました。入所した理由はここ最近聞いたのですが、育児放棄だったと聞きました。私はそれを聞いて、母と父を責めることはできませんでした。私の家族は兄姉が私を入れて5人もいます。そして、父と母は離婚していたので、母一人で5人も育てるなんて私だったら無理だな、と思いました。ですが、母が居ないだけで周りの友達と違うところが沢山ありすぎて、母でなく、施設の先生に文句を言ってしまいました。

母は全然会いにも来てくれませんが、やっぱり母を責めることは出来ず、施設の先生や自分を責めてしまいました。今年の夏休みに、母の事や兄姉の事で不安が溜まり、私は先生たちに抵抗してしまう事がありました。施設にいるとルールが沢山あったり、周りの子と違う事が沢山あります。なんで私はこんな施設なんかに居るんだろうとか、こんなところにいるんだったら生まれきたくなかったとか。色々考えてしまう事がありました。そして、施設の先生と揉めて、言い合いになったりした時なんて、先生たちを困らせるなら出て行ってもらおうよ。と言われた事がありました。

私はそれを言われた時、ふと考えました。私達児童が、養護施設から追い出されてしまったら、その先はどう生きていくのだろうと思いました。働くといっても高校を卒業しないで働くなんて難しいことで、帰る家もない状態になってしまいます。私の母親に頼る事も出来ません。頼る場所が無いのは私達、養護施設の児童にとってはすごくマイナスなことしかないのだと思いました。だから、養護施設があることは私達にすごく助けられているんだなと思いました。

ですが、私は精神的に追い詰められていて、暴れてしまっていました。そして、病院に連れていかれ入院する事になりました。3日間隔離される毎日でした。私は、その時先生たちは困った事があると毎日こんなふうに入院させるのかな。と不安になり、寂しくなりました。入院させられた理由は、自分を傷付けてしまうからでした。自分が悪い事はわかっているのですが、入院させられた時、見捨てられた感じがしました。結局、施設の先生も母親のように自分の側から離れていってしまうと思いました。そう思った時、もう傷つきたくないから誰もそう信じようとしたくないと思っていました。そうしたら自分は傷つかずにすむと思いました。そう思った時、施設から私は飛び出してしまいました。ですが、職員の人達は私の事を探して見つけてくれました。後々考えると、探しに来てくれた事に感謝したいなと思っている自分がいました。ですが、見つかった時に、3歳の頃から面倒を見てくれていた先生に、「お前はもう一人でやっていくんだな、もう助けはいらないんだな」と言われてしまいました。施設から出て行ったのは自分からだけど、そんなことを言われてしまうとショックだとし、どうしていいか解らなくなりました。私はただ、甘えていたなと思いました。私は、ただ助けて欲

しかっただけなんだと気付かされました。今、私は一人でやっていくことなんて出来なくて、一人になったら、もっともっとストレスが溜まってダメになってしまうんだと思いました。私のような助けてもらいたいけど口で言えなくて暴れてしまって、先生達を困らせている子は沢山いると思います。ですが、見捨てられしまうと、私達児童はもう助かりません。どんなに疲れさせてしまっても、養護施設にいる子ども達を見捨てないで欲しいです。

私のような子が沢山いるけど、見捨てないで欲しいです。施設の先生が疲れ切ってしまって子ども達を見捨てる環境を改善して欲しいです。本当に豊かな福祉社会を作って欲しいと思います。私は高校を卒業して、自分一人で暮らせるような人間になるまで見捨てないで、見守ってもらえるような人になりたいし、見守ってくれる人との出会いが欲しいです。豊かな福祉社会を作るためにも。

(群馬県立吾妻高等学校)

■ 佳作

豊かな福祉社会は私たちがつくりだすもの

森山ひかる

豊かな福祉社会をつくる一本当は、わざわざ作るものではないの
かもしれません。しかし、わざわざ作っても、なかなか豊かな福祉
社会とはなっていないのかもしれません。

私の母は、就労移行支援事業所というところに勤めています。

「何をしているところなの？」

転職したばかりの時に聞いたことがあります。

「困っている人たちに手を差し延べる仕事だよ。」

と、母は答えていました。

でも、前に勤めていたところは、市役所で、福祉関係や障害年金
などを担当していました。私は心の中で、今までの仕事の方がよっ
ほど、困っている人たちに手を差し延べる仕事だと思いました。

世の中には、いろいろなタイプの障害の人がいますが、母の働い
ている事業所には、特に発達障害の人たちが数多くいます。発達障
害について注目されたのが最近であるということもあり、ずいぶん
たくさん本を買って読んできました。

学校にも、発達障害かなあ？という人がたくさんいます。落ち着
きがない、覚えられない、絶対に自分のせいじゃないと感情的にな
る人たち。授業が中断し、学校行事などは遅々として進まず、たと
えば卒業式の練習もその人たちのために何度もやり直すことになり
ます。

あたたかい気持ちで見たいけれど、イライラしてしまうの

も正直な気持ちです。絶対に自分が悪くない、と意固地になってしまくと、徹底的に相手を責めて、泣き出すまでキツイ言葉で暴言をはき続けるので、周囲で聞いている人たちはうんざりします。

この人がいなければいいのになあ、と思ってしまうのです。

そういう人に限って、いろいろな係をしようとしたり、部活動にも参加しようとしたりして、意識は高いのですが、行く先々で問題をおこし、人間関係をめっちゃめっちゃにしていきます。

私も、さんざん振り回されて、出来れば一生しゃべりたくないと思ってしまいます。

こういうふうにいる人が多い中で、豊かな福祉社会をつくるのは現実的に難しいと思います。

いつも思うことは、その人のお母さんは何をしているのでしょうか？ 自分の子どもが問題の種をまきちらしているなか、謝りに来るわけでもなく、相談に来るわけでもないのです。このことを、文句を言っている私たちの親が聞くと、大騒ぎになることがわかっている所以说いません。なので、親たちは、日々の授業の様子を正しくは知っていないと思います。

地域のみんで支えて、というキャッチフレーズで福祉問題を解決しようとしていますが、根本的にいろいろと変化させていかないと実現にはほど遠いように思います。

ではどのような変化が必要かというと、日本国全体で変化させることは、忙しすぎる社会を緩和することです。

忙しすぎることで、立ち止まって声をかけたり、話を聞いてあげたりする心の余裕がありません。時間に余裕がないから、個性となるものも、障害になってしまうのだと思います。

本人とその家族の努力も必要だと思います。行政に丸投げして無関

心な家族についての報道を見ると、がっかりします。家族の人たちが一生懸命向き合っていれば、協力をしたい、と思う人は増えてくると思います。

最後に、教育は欠かせないと思います。私は小学校4年生のときに、福祉体験という講義を受けました。車いすや目が見えない状態の歩行体験をし、ディスカッションしました。

この経験は、大変貴重だと思っています。初めて車いすに乗り、車輪を回して移動したからです。結構腕が疲れました。これはやってみなければわからなかったことです。

きっと、発達障害の人の話や接し方の勉強会を授業で行えば、おらかな気持ちで話を聞ける人が増えると思います。また、新しいアイデアを思いつく人もいるかもしれません。

アプローチの仕方を変えたら、その人の人生まで変わるかもしれません。少なくとも、障害者施設で多くの人を殺してしまうような悲しい事件はなくなっていくと思います。

スマホアプリで、外国語がすぐに日本語訳になってしゃべってくれるものがあるように、体からでる電気によって、障害のある人たちの心の声をスマホアプリで知ることが出来たら、だいぶん楽なのになあ、と思います。言おうとしていることを、きっとそうかも…という予測でしか受け止められていなく、相手の機嫌が悪い所を見ると、当たってはいないようで、コミュニケーションが難しいといつも思います。大変なので、そのうち根負けして、障害のある人に意見を聞かないか、障害のある人の意見で進めていってしまうか、どちらかになることが多いです。

しかし、どちらも真摯な態度では絶対にないので心は痛みますが、非常に物事がスムーズに進んで気持ちがいいです。

豊かな福祉社会をつくる上で大事なことは、政治が作るものではなく、身近にいる私たちがつくるものであること。これだけは、間違いないことです。

(浦安市立浦安中学校)

■ 佳作

「福祉」をより近くに、 よりつながりのあるものにするために

田島 瑞生

私は普通の十七歳です。特に秀でた特技も無く、他人から称賛されるようなこともありません。そんな普通の高校生である私は、誰にも言いたくない活動をしています。理由は、褒められたいから。将来の目標を与えてくれた大切な大切な出会いでした。

私は将来、児童福祉を学び、福祉の現場を支えたいと考えています。児童福祉は、全ての人がその制度や支援を受けて健やかに育つため通る道であり、それだけ活動の場も広いと思ったことが一つのきっかけでした。また、里親家族や施設で育った友達がいるため相談を受けたり、話を聞く機会が多くあったことも大きな動機です。そのため、何か将来につながる活動とを考え、乳児院で継続してボランティアを始めようと決意しました。

活動初日、バスに乗りながらどんな子供達なのだろう。上手く接する事が出来るだろうかと少し不安に思いました。保育園でのボランティア経験はあったものの、乳児院とではどこか漠然とした「違い」を意識していたからだと思います。しかし、実際の活動は心配も無用で、あっという間の四時間だったのでした。私が感じたことは、乳児院であっても子どもの笑顔や元気さ、そして、一人一人の持つ個性という輝きは何も変わらない、ということでした。

学校のある先生にこのボランティアの件を話した時、私はとてもがっかりしたことがあります。それは「人の役に立つなんて、偉い

ね。かわいそうな子達の力になれることはすごいことだよ。」と言われたことでした。確かに、忙しい保育士の方の手伝いが出来た事は役に立ったのかもしれませんが、しかし、「偉い。すごい。」と言われたことに、私はまだまだ福祉についての理解や意識が広まっていないことを実感しました。なぜならば、福祉と関わることが「偉い。すごい。」ことだということはそれほどまでに高尚で、人から称えられる対象である。ということだからです。

福祉という言葉は「幸せ」「安定」した生活や社会環境という意味を持っています。誰もが幸せになる権利を持っているのだから、人は助け合って共生していくのが当然です。それなのに実際は福祉を特別なものと捉え、自分とは関係ないもの、「してあげる」ものとする人が多い事も事実です。

保育園でのボランティアは「楽しそう」と言われるのに、何故同じ児童福祉施設であるはずの乳児院でのボランティアとなると「偉い。すごいね。」と言われるのでしょうか。それはやはり、福祉に対してどこか「心の壁」が存在するからだと思います。障がい者、高齢者、家庭に事情のある子どもはもちろん、私達も皆が福祉の対象です。大きく言えば、同じ人間です。様々な人と関わり合って社会が成り立っているからこそ、福祉は特別なものであってはならないのでしょうか。福祉は、私達のすぐ身近にある、支えあるもの、そして一人一人の「福祉」の形に寄り添う事の出来る多様性を持つものであるべきだと私は考えます。

乳児院で、私は何人もの赤ちゃんや子供達を抱っこしました。ミルクをあげ、オムツも交換しました。私は子供達の母親ではありません。しかし、様々な事情がありこうした施設に頼らざるを得ない状況が起きているのもまた現実です。私は、より多くの人が福祉と

関わって共生していくために、福祉の場を広く開くことが大切だということを学びました。それは、実際に職員の方が地域の行事に子どもと一緒に参加したり、ボランティアを募ったり、交流の機会を設ける姿を目にしたからです。福祉をより近くに、より繋がりのあるものにし。豊かな福祉社会を目指すために、一部の関係者だけでなく全ての人や機関が対等な関係で連携し、補いあいながら暮らすことができたならどんなに良いでしょうか。

福祉は特別な言葉でも何でもないと思います。私がボランティア活動について話すのを嫌うのは、ボランティア、福祉といった言葉がまだ特別なもののように捉えられがちだからです。感心をするのではなく、もっと多くの人に興味を持ってもらい実際に福祉の現場を知ること、福祉は身近なものだと感じてもらいたいと思います。

誰もが当たり前幸せを求め、手を取り合って繋がる社会へ。人の優しい心が、こらからの明るい福祉社会を支える強く大きな力になると信じています。

(大妻嵐山高等学校)

■ 佳作

様々なボランティアから得たもの

廣瀬花音

豊かな福祉社会にするためには、まず、自分たち一人一人の意識が大切になってくる。ただ、口で「意識する」「積極的に参加したいと思う」など言うのは実に容易だ。実際に行動してみなければ意味がないのだ。

中学三年生までの私は前述のようだった。どの社会問題でも人ごと、ボランティアの募集があっても誰かがやるだろう。そうやって過ごしていた。

しかし、中学三年生の時にたまたま参加した「ボランティアリーダー養成講座」で社会の見方、考え方などが変わった。

このボランティアでは保育園や老人ホーム、救急法など様々な貴重な体験をたくさんさせていただいた。保育園に行った時、たくさん子どもたちと遊んでとても楽しかった。帰る時間になり、保護者の方が続々と来た。その中で一人、とても大変そうに迎えに来たお母さんがいた。職員の方との話を聞くと、先程まで仕事をやっていて、これからまた夜のお仕事があるのだそう。ほとんど毎日、一人もしくはおばあちゃん家でご飯を食べていると聞いた。その影響もあるのだろうか、給食の時間は人一倍元気がよく、注意して見守りをしていないと何か事故が起こりそうなのは一目瞭然だ。

また、高校三年の8月に参加したボランティアでも同じようなことがあった。これは三泊四日、東京と吾妻の子どもたちが交流を行うというものだった。私の担当した班の中に、話す事が少し苦手な

「人見知り」の子がいた。案の定、二日目のお昼まで班の子どもと全く話すことはなかった。二日目はディズニーランドにいったという事もある子どもたちのテンションも高かった。その中でお昼ご飯の時間になった。その子はお腹がいっぱいだったのだろうか、少しペースが遅かった。大丈夫か心配していたが、一人の男の子がその子に話しかけた。「○○っていうアニメのキャラ誰が好き？確か観てるって言ってたよね。」最初の自己紹介の時にその子と話したアニメの話をし始めたのだ。小学生には人気なのか、すぐにその話で盛り上がっていた。私が一番驚いたのは、ディズニーでもほとんど喋らなかった子が、すごく笑顔で班のみんなと話していること、食べるペースが遅かったのに食べ終わるのがとても早くなったことだった。

この二つの出来事から私はある事に気づいた。「食事というのはただ栄養を摂るためだけにあるのではなく、心の栄養も同時に補給される大切な行為ということ」私も母子家庭であり、夜遅くまで仕事だったため小さい頃から親のいない食事を行っていた。小さい頃は、妹がいたとはいえ、二人だけの食にはどこか寂しさを感じたものだった。その経験から、ボランティアで会った保育園の子どもは私以上に寂しいものだと思った。幼少期の頃から一人で食べるというのは、温かいご飯でも美味しく感じる事は難しい。出来たてを家族で食べてこそ心のケアだと思う。

私の母は将来的に「子ども食堂」というのを営業したいのだそう。「子ども食堂」とは、夜一人でご飯を食べざるを得ない子どもたちに、安値でご飯を提供する。母子家庭で大変な思いをしているお母さんの相談相手、一人暮らしのお年寄りの方への食事提供などを行うものである。また、全国的には例が少なく、改善点も多い。私の

住んでいる地域にも、まだ導入されておらず、困っている人もたくさんいる。女手一つ、介護福祉士である母は今の社会の現状から一層営みたいと思っている。私も将来的には母の手伝いとして子ども食堂と一緒に営んでいけるようになりたい。様々な改善点や課題もたくさんあり、営むことが困難になることがあるかも知れない。でも、地域の方にこの心の栄養を補給できる人になりたい。場所を提供したいと思っている。

また、この事を気づかせてくれたボラティアにも感謝し、こういう場、子どもたちが伸び伸びとスポーツや様々な体験ができる場というのを増やすべきだと思う。

豊かな福祉社会にするためには、口に出したら次に行動に移すことが大切で、様々なボランティアに参加できる機会をみんなが持つ事が大事になると思う。だから私は、今後もずっとボランティアに参加し続けて支援していきたい。

(群馬県立吾妻高等学校)

■ 佳作

豊かな福祉の社会のために

林 萌香

日本は今、医療の発達によって平均寿命が大幅に拡大しています。それに伴い、介護を必要とする高齢者が増加しています。しかし、介護の現場では人材不足に悩まされ、介護難民と言われる方も増えてきています。介護を受けたくても受けられない。施設に入所したくても出来ないという深刻な問題です。日本はこれから今よりももっと多くの高齢者が増えると言われています。

私は中学三年生の時に、祖父が老人ホームに入所しました。祖父のいる施設に行くと、普段無口な祖父が職員の方と笑顔で楽しそうにコミュニケーションをとる姿がありました。何度か施設に行くたびに、私も利用者の方を笑顔にすることができる明るい介護職員さんになりたいと思いました。そして私は、介護の勉強をすることが出来る福祉科に入学しました。授業の一環として計53日間の実習を行ってきました。その中で特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、訪問介護、通所リハビリテーションなどの様々な施設で介護の学習をしてきました。実際に施設で実習をしてみると介護の大変さはもちろん、人手不足という問題を知ることが出来ました。人手不足の施設は、介護福祉士が入ってくるまで派遣の人が繋いでいるという現場に驚きました。学校に来て下さった方は、海外まで訪れ介護職員として働いてくれる人を探し、教育していると話して下さいました。私達の知らないなかで沢山の人が介護を必要とし、沢山の

人が介護を提供するために頑張っているのだと知りました。このことは福祉科に入り実習や勉強をしなければ解りませんでした。実施にニュースなどでは介護の人材不足と取り上げますが、真剣に考えている人はあまりいないと思います。「あーそうんだ。」「介護って大変だもんね。」「私は絶対にしたくない」という声を聞いたことがあります。もちろん人によって目指している職は違いますが、介護＝3Kという印象がついてしまっているからではないのかと思います。3Kは「汚い」「くさい」「給料が安い」と一般的に言われているのを耳にしたことがあります。オムツ交換や仕事内容に見合った給料ではないから…というのが言われていると思います。しかし、ある介護士さんなどから、「便が出て嬉しいと思う仕事は介護士さんだよ。」と言われたことがあります。もちろんオムツ交換は大変です。でも、何日も便秘だった人から便が出た時は、本当に嬉しく思います。しかも利用者の方から「ありがとう」という暖かい言葉をもらうことも出来ます。介護という点だけに見続けるのではなく、ちゃんと利用者さんとの楽しいコミュニケーションやレクリエーションがあることも知って欲しいです。

私が中学生の時、介護福祉士を目指すことを友達に伝えました。すると、「介護って大変なのに給料低いんでしょ。」「うんちした人のお世話したり汚いじゃん!」「よくやろうと思ったね。」と言われました。今思うと、これから介護を担わなければならないのに、そんなことを思っている人がたくさんいたのはとても残念です。こんな風に考え方が広まってしまうのは、やはりイメージだと思います。3Kはもちろんそうですが、大人のオムツ、排泄介助は…と介護現場を実習に見ずに憶測で考えていると思います。介護には利用者さんと関わり、レクやコミュニケーション、介護を通して信頼関係が

生まれます。もちろん大変な面はあります。利用者の方の気持ちに寄り添い、介護を行うことで有り難い言葉をもらうこともあります。

介護だからと悪いイメージを持つ人がいなくなるように、介護は人生の大先輩と過ごし、時に怒られることがあるけれど、昔の話をしたり、リクリエーションをしたり、楽しい事はたくさんあります。時には季節の行事があったり、利用者の方の誕生日を施設の方全員と祝うこともあります。

もちろん大変な仕事ですが、こんなに「有難う」という言葉がもらえる仕事はないと思います。マイナスな部分だけでなく、介護のやり甲斐、楽しさを伝えていけば、介護職員も増えると思います。そうすれば、この先、介護難民も減り、豊かな福祉社会が生まれると私は考えます。

(群馬県立吾妻高等学校)

■ 奨励賞

福祉を学習して

尾 嶋 誠

資格を取得して、給料をたくさん貰いたいです。一方では、資格をとって働くことで、いろいろな人に貢献出来るようになりたいです。

4月から学習して間もない7月末に介護技術コンテストに出場しました。昨年の1年生の夏休みに介護サポーターという福祉・介護に興味のある生徒が参加する講習会に参加したので、今回は、介護技術部門に出場しました。介護技術部門は、5校が競うコンテストでした。自分のチームは、お題を7分で終了することができました。その後のアピールや審査員の方からの質問では、話す内容が少なくなっていました。他の学校を見学したら、すごく速く、的確な介護をしていて、何より声かけがとても多く圧巻でした。自分もいっぱい練習して、優勝した学校の様になり、賞を取りたいと思いました。アピールのとき沈黙が多くなっていましたので、途切れないアピールをしてみたいです。今回の経験を次回に生かせるように頑張りたいと思いました。

介護職員初任者研修の資格取得を6月より受講しています。カリキュラムの中に施設実習が必修となっています。9月に30時間施設実習をしました。私は、特別養護老人ホームに行きました。辛かったことは、声が小さくて利用者さんに伝わらなかったり、朝の送迎車の中で、会話ができなかつたら眠くなってしまうたり、昭和初期

の聞いたことのない歌は、一緒に歌うことが出来なかったことでした。失敗したことは、利用者さんや職員の名前を覚えきれずにまちがえたり、利用者さんに物を持っていったいいか聞けなくて動けなかったことです。嬉しかったことは、利用者さんが昔の事を思い出して笑顔を見せてくれたことや、衣服の着脱をするとき、ご自分でもできるところを協力してくれたり、実習生の自分の名前を覚えてくれ、コミュニケーションがとれたときはうれしかったです。

実習で学んだことは、利用者さんに合わせてコミュニケーションをしなければいけないことや、一人ひとりの個性を大事にし、入浴時に着脱介助をするロボットがあったことです。

学校での介護技術練習では、利用者1人の設定で行うので楽であるが、現場では、1対多数の人を介助しなければならないので、大変です。職員さんは、毎日するので、大変そうでした。リアルな現場を見ることで自分が持っていた介護の考え方が変わっていきました。今後の学習にイメージが浮かび理解しやすくなったと思います。

福祉を選択して途中ですが、授業が進むたびに「なるほど」と思う介助が何度かあり、少しずつ気持ちが変わって、「利用者さんのためにどのような仕事をしようか」を考えるようになりました。相手の考えを大切にした介護が良いと思いました。しっかりとコミュニケーションを取りながら、利用者さんに無理のない介護をしたいです。時には話せない人もいますので、その時はその人の目を見て介護してみると利用者の思いがわかるかもしれないと思うので、介護で大切なのは、目を見ることだと思いました。

福祉より高い目標があるのですが、福祉を第2の目標にしています。目標の一つなので、全力で勉強をしていきたいです。

先日、県の障害政策課の方の見学がありました。タオルケットを

かけた利用者の方のシーツ交換を声かけを入れた介護技術の見学でした。練習では、合格を貰っていたが、実際にしたらセンターがずれ、緩いベッドメイキングになってしまい、自分でも失敗したとおもいました。見ている人がいても失敗せずに出来るようにしたかったし、悔しいので、そうできるように頑張りたいと思いました。

見学後、アロマハンドマッサージを学習して先生方に練習代になってもらいました。自分を指名してくれる先生が多く、とてもよかったです。将来は、目標とする仕事があるが、とてもレベルが高かったので、次の福祉の仕事と考えています。しっかり学習して活かしていきたいと思っています。

(群馬県立高崎高等学校)

専 門 職 の 部

■最優秀賞

障害者の共生社会のための環境を叶えて！……………堀江 敦子

■優秀賞

私にできること……………相澤美智子

■佳作

介護者支援の強化……………中野 雄介

ホームレス支援の現場から福祉社会を考える……………平田 真基

■ 最優秀賞

障害者の共生社会のための環境を叶えて!

堀江敦子

「障害者が実習に来て何ができるのか？何をさせたらいいのか？」と実習現場の方からの反対に遭い、会社の人事担当者の積極的な受入に対してのギャップに驚いた。私が3年前に特別支援学校に転勤してまもない遭遇でした。本校は、高等部単独校で一般就労を目標とする手帳をもつ知的障害者の生徒が通う学校だ。知的障害者というと脳性麻痺をイメージするようで、何もできないと一括りにするようだ。普段の生徒は、礼儀正しく、真面目で、素直な生徒だ。文化祭では、2時間に及ぶミュージカルを暗記でこなす。

少子高齢化の社会情勢で介護力不足の中、H21に特別支援学校高等部の学習指導要領に福祉が導入され、生徒の一般就労先として福祉分野の参入をH27から開始した。H27年度に介護職員初任者研修の事業所指定をとった。県の特別支援学校で福祉を学習しているのは本校が唯一で、福祉の資格取得をしているのも本校が唯一である。他県の企業からは、本当に事業所指定がとれたか何度も確認された。問題は、学校現場からの立ち上げのため、予算も、設備もなく、何もない状態から開始した。一方で、予算をいただく応募にエントリーし、各種の福祉業者に頼み込み寄贈をしてもらい、介護技術の授業になるまでにベッドを手に入れるという、予算も、設備もない状態だった。空き教室を使い、教育課程の変更もないので、授業の空き時間や放課後に130時間の講習会を入れ、一期生は学習した。資格のある講師は私一人のため、外部講師を頼まなければでき

ないが、ボランティアで講義をしてもらった。講習会に必修の施設実習に生徒を出すために、感染症の保険を調べたら、2週間の短期保険がなかった。大手3社に交渉したが、全く返事が返ってこなかった。障害者が働いてはいけないのだろうかという疑問をもった。親は、この子を残してと心配となり、当事者は、大人として社会所属による役割や社会参加による生きがいというモチベーションの向上になる。医療保険、介護保険と同様に障害者年金も将来的に減少すると予想される情勢から、働くことも大事なので、この企画の継続は必要である。最低限の設備やボランティアの協力で大変苦勞して幸いにも1期生は100%合格した。1期生を指導しながら、2期生の予算や設備の手配もした。2期生も100%合格した。

今までの教員生活すべての知識経験から確実に費用を手に入れる方法をとった。高等学校なら問題にならないが、特別支援学校は前例がないので、産業界の会員になるのに1年かかるという行政の壁に当たり難航し、一步ずつ解決することも同時にすすめた。障害者が働くことに行政や政策の整備がこんなにも整備されていないことに何度くじけそうになったことか。目の前の生徒をみれば、頑張るしかないが、行政は岩盤のようだ。出張も自腹で、他県の視察に出かけ、その結果を持って本県に適用の可能性をかけて主管に交渉した。前例はありがたく、研修期間が8ヶ月以内で修了させるのを伸ばしていただいた。これにも1年かかったが、行政を動かした初めての事例である。今年度の途中からの公示のため3期生から一部適用した講習になった。

制度や設備や予算だけでなく、生徒の活躍の場も1期生から依頼した。県高校生介護技術コンテストに出場させてもらった。介護技術部とベッドメイキング部の両方に出場させてもらった。1位は取

れないが、高等学校生と同じ土俵で戦えることで生徒の自信につながった。

生徒は、思いを活字にすることが困難ですが、場面を捉えて思いを聞いておき、それをつなげて作文として応募した。高等学校生のコンテスト掲示板には、次々と応募する広告があるが、特別支援の生徒がエントリーできる応募は全くなかった。教員生活で応募したコンテストの中で、可能性のあるもの2つに、交渉した。1つはこの応募だ。もう一つは、作品出品だが、レベルが低いから賞には入らないが、賞状を出してくださった。才能があるのにそれを披露する場のないという壁にあたった。今年挑戦しているのは、本県のアビリンピックで福祉部門の立ち上げをすることだ。これも全国では鹿児島県しかない。委員会で審議してくれることは決まっていて、結果待ちであるが、前例がないので期待は難しい。最大な課題は、学校現場からの立ち上げのため、本校独自で実施しているので介護職員初任者研修の継続である。学校管轄からの運営に値する予算はもらっていません。本当にこんな学校があるのだ。本校も指導者が定年により、閉じてしまう可能性もある。1期生の忘れられない思いがある。それは、「私たち障害者は何もできないと思っていますが、できるのです。」と強く言っていた。知的障害の高等特別支援の生徒が共生できる社会をくださいと声を大にして言いたい。

私にできること

相澤美智子

「おはよう」「おはようございます」「元気ですか？」明るい声が飛びかう。今日も新しい朝、新しい一日の始まりである。

私は伊豆大島にある知的障がい者入所施設「大島藤倉学園」に勤めている。ここでは、78名の利用者と80名程の職員が生活を共にする。今年98周年を迎えた学園は、キリスト教精神に則り、創立されて以来毎日礼拝を守り続けている。

午前9時、私は利用者の手をしっかりと握って礼拝堂へと移動を開始する。「おはよう」「こんばんは」「えっ、こんばんは？」と挨拶の輪が広がる。笑顔の輪も広がる。

礼拝では、賛美歌を歌い、聖書朗読を聞き、主の祈りやひとりひとりの祈りを捧げる時間をもつ。礼拝が終わると誕生日を祝うコーナーがある。誕生者は「〇〇さん、こちらへどうぞ」と呼ばれ、皆の前に立つ。今か今かと自分の名前を呼ばれるのを待つ人、にこにこしている人、恥ずかしそうにしている人など様々だ。皆で「ハッピーバースデー」の歌を合唱する。この世に生を受けた記念の日を喜んで迎え、共に元気に祝うのである。

誕生日の祝いの他に、ボランティアさんや職員の送別の日には賛美歌405番を歌う場面がある。「また会う日まで、また会う日まで、神の守り汝が身を離れざれ」と歌う。賛美の大合唱は天の父なる神様にまで届き、そこに集う人々や学園に連なるひとりひとりが、目に見えない力で守られ、導かれて行く…そんな風に私には感じられ

るのである。

「トントントン、入りますよー」「いいですよー」。元気な I さんの声がする。「洗濯物しまっていていい?」「うん、いいよ」と言って、I さんは私がタンスの中に彼女の衣類を収める間、カゴを持って手伝ってくれる。

「トントントン、トントントン」。廊下では M さんが口真似をしている。「入りますよー」私が部屋へ行くと「誰ですか?」とか「うるさいぞ」と反応がある。なかなか 1 対 1 の対応ができない M さんとの交わりは、私にとって大変貴重な時間であり空間でもある。

「トントントン、誰かいますか?」「うーうん」。S さんは私が部屋に入ると、レゴブロックを組み立てる手を止め、自分のタンスはここ、それはあっちだよ…と動きながら指示をしてくれる。大層親切だ。私が衣類の収納を終えると、安心して再びブロックを手にする。

利用者は人なつっこい。声、手、目をかけられることが大好きだ。1 対 1 になると、本音、本心が見えてくる。私の気持ちが自分にどの位向けられ、愛情が注がれているかを瞬時に察知する。怖いぐらいだ。神様のように平等に人と関われないとは知りつつも、利用者との関わりが公平でないのはジレンマである。

家族の元で生活していれば、親や兄弟姉妹と接する時間もあり、甘える時間もあるだろうが、学園は離島にある施設だ。殆どの利用者が大島以外の土地から、海を渡って来ており、寂しさ、恋しさをかなり我慢して生活している。いつの間にか利用者と職員は喜怒哀楽を共にし、大きな家族のように暮らしているのだ。

さて、利用者の平均年齢は 50 歳近くになった。したがって、保護者の年齢も高くなり、兄弟が保護者になったり、成年後見人を立てるケースも出て来た。「学園にこの子を預けているから私たちは

生活できるんです」と収穫感謝祭に大島を訪れたお父様が言った。「いつまで学園に来ることができるか？この先どうなるのか？」と将来を心配するお母様もいらした。「大丈夫です。私たちに任せてください。神様に委ねましょう」と即座に言えなかったことは、今ものすごく残念だ。私が誇りを持って、もっと自信を持って仕事をしていれば、ためらわずに応答できたのではないか—そう自問自答する日が続いている。

職員との親睦会で保護者が歌う「星影のワルツ」を思い出す。別れることは辛い、君のため仕方がない、冷たい心じゃない—と涙ながらに歌う父兄の姿に胸を打たれる。大切な命を預かることに身も心も気も引きしまる。

福祉の現場に限らず、あしたに向かって、私にできることは何だろうか。それは、自分のすぐ近くにいる人、隣人と積極的に関わることだと思う。老若男女、障がいの有る無しに関係なく、手足、目、口、耳、言葉、身ぶり等、あらゆるものを全部使って人と関わりたい。相手の個性を尊重し、ひとりでも多くの人と向き合えたらいい。背筋をピンと伸ばし胸を張って生きてみよう。そうしたら、常に私たちと共にいてくださる神様が、愛と希望の光を惜しみなく分けてくれるに違いない。

「わたしの目にはあなたは高価で尊い」と聖書の御言葉にあるが、神様は私たちをかけがえのない存在として覚えておられる。だから恐れることなく、ためらわず、まずは隣人と共に喜んだり、泣いたり、笑ったりしてみたい。心の中の遠慮や迷いを、神様の知恵と力を頂いて少しずつ払拭し、人として一回りも二回りも大きく成長していきたい私である。

(社会福祉法人藤倉学園大島藤倉学園)

介護者支援の強化

中野 雄介

私は、現在、介護福祉士として介護老人保健施設で高齢の方々のお世話をさせていただいている。

帰路の途中であった。

「おばあちゃん おばあちゃんー」

ふと見ると我が施設の利用者さんのお嫁さんの姿だった。

「どうしたんですか？」

「おばあちゃんが家からいなくなって……」

焦っている表情が私にも伝わってきた。

（早く見つけてあげないと外が真っ暗になってしまう…）

「じゃあ、手分けして探しましょう」

私は職員・ケアマネージャーを呼び出し、自治会メンバーにも声をかけて、まずは、おばあちゃんの散歩コース周辺を探すことにした。

数時間は経っていた。

「いたー。おばあちゃん見つけた。いたー」

地域の人がおばあちゃんを見つけてくれた。その大きな声に、みんなが駆け寄った。

みんなが安堵した。

外はもうすっかり暗くなっていた。

おばあちゃんは何もなかったように“キョトーン”。でも少しばかりは震えていたようにも思う。

「だめでしょ！おばあちゃん。勝手にお家を出たら困るでしょ。もうみんな心配したんだからね!!」

お嫁さんはおばあちゃんをきつく叱った。心配したお嫁さんの気持ち、私にはよくわかった。しかし表情は、私が見ていても恐かった。この鋭い口調、いつもと違う雰囲気、とまどいを感じていた。

「なあに、おばあちゃんは、単に散歩していたんだね。あつ、“かくれんぼ”だね。ハハハハハ…」

ケアマネが、おばあちゃんの肩にそっと触れ、ゆっくりと語った。おばあちゃんは、ちんまりと小さくなって、

「うん…」

小さな声でうなづいたよう。

この「徘徊」を「散歩」と言いかえてのケアマネの言葉の表現力に敬服した。惨敗だった。散歩と言いかえることで誰も傷つくことはなかった。おばあちゃんの自尊心を傷つけることなく尊厳を重視。(今回のかくれんぼごっこは、おばあちゃんの勝利だった。)

言葉ひとつで貝になるということ。

この心のケア、現場での介護を知り尽くしたプロの技を私は目のあたりにしたのだ。

そしてこのスタッフと共に自分が働けることを喜ばしく誇りにも思った。

このように利用者が帰宅し、介護を自宅へ移行する時、特に全てを自宅で介護する介護者のことを考えていきたい。

それは「介護者支援の強化」を充実するべきだということだ。

介護者の約半分が介護疲れのように感じている。なかには介護と仕事が両立せず、離職せざるをえなかった人もいる。「鬱」状態が

続いているという。介護者の環境づくりがポイントだ。

例えば、「介護者手帳」の発行。要するに、母子手帳の高齢者版、障がい者版といったものに値する。高齢者、もしくは障がい者と介護者の心と体の健康診断を記録した健康手帳だ。

手帳を持つことにより、記録が残る。両者が健康を自覚する習慣付けになると思う。自宅で介護する介護者は無休で無給の重労働者、介護する時計に今日も針がなく多忙な日々を過ごしている。育児と違って先は見えず、長期戦となる。介護した嫁は相続権なし。

だからこそ、介護者へ希望と未来を届けたいと思う。平凡な生活を送っていただきたい。

日常的に介護を担う家族を「主な介護者」として行政が認定するのはどうだろう。せめて年1回は健康診断の義務付け、さらに1週間位、介護休暇を保障できればと思う。

介護される側にとっても、介護者の健康が心配でないわけではないはずだ。共倒れにならないためにも実現させていきたい。

家族を救うことが、在宅介護の継続に繋がっていくと思う。

根本的には、要介護を防ぐことにある。要介護にならないためにも、予防のためにも、「認知症」については適切な治療を受ければ症状の進行を遅らせることができるそう。65歳以降の健康診断で「認知症」の診断も項目に入りたい。40歳以降からはメタボ検診があるのと同様に年齢に応じた健康診断項目は必須であると感じるのです。

高齢の方、ご本人にも、それなりのレベルに適して要介護にならぬよう貯筋に努めていただこう。私もシルバー世代をゴールドへと輝けるよう日々、努力を重ねていきたい。

(介護福祉士)

■ 佳作

ホームレス支援の現場から福祉社会を考える

平田 真基

「ホームレス」という言葉から連想されるキーワードはどのような言葉だろうか。

「怠け者」「汚い」「怖い」「段ボール生活」…

おそらく良いイメージのキーワードが出てくることはほとんどないだろう。では「ホームレス」と呼ばれる人はどのような人たちで、どのような生活を送っているのだろうか。

私も5年前までは「ホームレス」に対して無意識のうちに目を背け、偏見を持っていた一人である。だが、社会福祉士の養成校で出会った講師の「路上にはあらゆる社会問題が潜んでいる」という一言が私の「ホームレス」に対する見方を変えた。

5年前の出会いをきっかけに私はホームレス状態にある方の生活支援の仕事に携わることになり、今まで延べ100人ほどのホームレス経験のある方々の支援に関わってきた。職を失うと同時に会社の寮を追い出され住まいを失った方、家族との別れをきっかけにして生活が激変し生活基盤を失ってしまった方、出所後の受け入れ先がない方、目に見えにくい障害が周囲から理解されずに孤立してしまった方など、一人一人ホームレス状態に陥るまでの背景や生きてきた環境は様々である。社会情勢や家庭環境、犯罪や障害などの要因が複数絡み合っていることが非常に多い。近年では2008年に行われた池袋における調査をはじめとしてホームレス状態にある者の中に一定程度の精神疾患や知的障害が疑われる方が存在するとい

う研究報告もされており、ホームレスと障害との関連性が指摘されるようになってきた。

私は学生時代、東京YMC Aの活動で知的障害のある子どもたちとのキャンプや野外活動に関わってきた。その活動をきっかけに福祉の仕事に関わり始めたのだが、その時はまさかホームレス状態にある方に知的障害の方がいるということはこれっぽっちも想像していなかったし、活動中無意識なうちに同じ公園内にいるホームレスと思われる方を避けてしまっていたこともあったことをホームレス支援の現場に携わり始めた時にふと思い出した。福祉職を志している人の中でホームレス問題が福祉全般の課題であるという認識を持っている方は果たしてどのくらいいるだろうか。私はその認識を少しでも持ってくれる仲間を増やしていきたい。

ここで私が関わった事例を一つ紹介する。私が支援で関わったAさんは軽度の知的障害を有する方である。日常会話やコミュニケーションはほぼ問題ないが、計算や文字を書くことが苦手な特別支援学校に通学していた。ところがある日世話をしてくれていた母が病気で他界してしまったことをきっかけにAさんの生活は激変してしまう。父親による虐待があり、児童養護施設での生活を余儀なくされる。その後関係が修復し父親と再び生活をするようになるが、本人が知らないところで父がAさん名義で借金をしてきてしまい、債務を負ってしまう。そしてその父も他界してしまい、Aさんは天涯孤独の生活を余儀なくされてしまう。計算の困難さゆえに金銭管理が苦手であり、職も失っていたAさんが生きていくために取った行動は窃盗であった。前の職場の建築機材を盗んでそれを売って生活していたが、事件が発覚し逮捕。拘留されたのちに釈放されたが、家賃を滞納しており帰る家がなかったAさん。弁護士からの依頼で

ホームレス状態のAさんの支援に携わり、住まいの提供や生活保護の申請、職探し等を一緒に行った。

Aさんのような軽度知的障害を持つ方は周囲の環境によって大きく生活は変わってくる。障害者に対する就労支援制度、障害年金や生活保護など、生活していく上で必要な制度は存在するものの、必要としている人に制度等の情報がいき渡らずにどう利用していいかわからないことも多い。私は社会福祉士として、福祉制度による支援を必要としている人に適切な情報が行き届くような世の中になることが豊かな福祉社会を作るために必要なことだと思っている。

そのためにも、「ホームレス」という言葉に代表されるような貧困問題に対する偏った見方やイメージを少しでも変えていきたい。

(特定非営利活動法人 ほっとプラス)

一般の部

■最優秀賞

九十九髪（つくもがみ）、心眼のピアニスト 丸山有加里

■優秀賞

人間杖 近藤 和子

人生の下山を目指す 矢矧 秀司

■佳作

家族で乗り越える 一柳 博之

支援の輪を広げよう 召田 俊雄

■ 最優秀賞

つくもがみ 九十九髪、心眼のピアニスト

丸山有加里

「いい曲ね。この時雨にぴったりな曲だ」

一曲弾き終わった途端、居間のソファに座る祖母が小さな拍手をしてくれた。

「でしょ？今の曲は、『雨の庭』って曲よ」

「そうかい…確かに、強い雨の音のようにも聴こえたねえ」

祖母は雨に濡れる庭を窓越しにぼんやりと見遣った。だが、その眼には、一体どれほどの輪郭と色彩が映っているのか。

祖母は、耳で雨を感じている。十年前から目を患い、今や殆ど視力は失われている。失った視力の分、せめて聴力で楽しませてあげたくて、私は祖母の大好きなピアノを一日に一曲弾いている。

目が不自由な祖母は、生活の節々で家族の介助が必要となる。自宅で学習塾を開く私が、共働きの両親に代わって主に祖母の介助をしていた。自由も制限され、気軽に外出もできず、苦勞も多かったが、幼い頃から面倒をみてくれた祖母のために、私は日々奮闘した。視力以外は健康な祖母は、九十歳とは思えぬほど矍鑠とし、頭もしっかりとしていて耳も遠くはない。そう、一日中断続的に降り続く時雨の音を聴き取れるくらいには。

「おばあちゃんも昔、ピアノを習いたかったんだよ。でも戦時中で、とてもそんな余裕はなかったからね。憧れのピアノを孫が弾いてくれるなら、それだけでも幸せだ」

幸せと言う割に、淋し気に微笑む祖母を見て、無性に切なくなっ

た。戦争でピアノを弾く青春も奪われ、視力も奪われ、このまま暗闇の中で祖母の人生が終わってしまうなんて、そんなの哀しすぎる。そう思った刹那、衝動的に口走っていた。

「おばあちゃん、ちょっとだけピアノを弾いてみない？ 鍵盤が見えなくても大丈夫！ 私の手で教えてあげるから。ちょっとだけ一緒に弾いてみようよ」

「そんな、無理よ…」祖母は驚き、困惑したが、私が何度も勧めると、やがて心を決めて頷いた。祖母の手を取って、ピアノの前へ座らせた。そして、皺だらけの右手の五本指を鍵盤の上へ誘導する。

「おばあちゃん、親指の鍵盤がドだよ。ゆっくり弾いてみて」祖母が恐る恐る親指で鍵盤を押すと、弱々しい『ド』の音が遠慮がちに居間に響いた。

「ブラボー！」

祖母が右手だけで『雨ふり』を弾き終えると、音楽教室の中の小さな会場に、割れんばかりの盛大な拍手喝采が沸き起こった。

五年前から祖母が通うピアノ教室で開かれた、小さな発表会。大人の生徒達が一年に一度、毎日の練習の成果を発表する舞台だった。

高齢のため、祖母はピアノの前に座ったまま緩慢な動作で深々と聴衆の皆に頭を下げた。介助のために隣に座っていた私も一緒に。演奏者三十人の中で、最も簡単で短い曲なのに、完奏するのに誰よりも長い時間を要した。リズムもバラバラ、ミスタッチばかりで、何度も途中で演奏が止まってしまった。でも、三十人の中で最も拙い演奏に、最も上手だった演奏者をも凌駕する盛大な拍手が贈られた。九十五歳、最も高齢の演奏者に。それを聴く、見えない祖母の瞳から大粒の涙雨が滴り落ちる。

「四十の手習いと申しますが、私はその倍以上、九十からの手習

いで孫にピアノを教わり、五年目になります。孫は見えない私の眼となり、手となって今まで一緒にピアノを弾き続けてくれました。こうして私が子供の頃からの憧れのピアノが弾けるのも、孫のお蔭です。私は百歳までピアノを弾き続けます」

祖母の言葉に再び大きな拍手が会場を震わせた。私は胸がいっぱいになり涙が止まらなかった。長年の葛藤が消え、苦労が報われた瞬間だった。主催の先生の粋な計らいで、祖母に『百歳まで続けま賞』が贈られた。私は密かに『百歳まで教えま賞』を自分に贈った。目が不自由な九十を過ぎた祖母に、右手のみとはいえ、ピアノを教える事は並大抵の苦労ではなかった。毎日の生活の介助だけでも大変なのに、何故このうえ酔狂な提案を口走ってしまったのか、自らの失言を悔やんだ日もあった。でもどんなに躓き、苦戦を強いられても、祖母は一度も『もうやめる』と弱音を吐いた事はなかった。そんな祖母を間近で見守り続け、私は気付かされ、決心した。

年齢も障碍も関係ない。ピアノは、祖母の少女時代からの夢。人は夢を持っていれば、どんな障碍や試練の前でも心を強く持って、明日に希望を抱いて生きられるのかもしれない。祖母が窮屈な世界を広げようと心の眼を見開き、光差す明日をその小さな胸に芽吹かせたならば、私はその傍らで伴奏していこう。…いいえ、祖母だけではない。困りごとを抱えている人達に出逢ったなら、さりげなくスマートに手を差し伸べられる人間でありたい。未来の自分自身の為にも。人は加齢と共に体の自由も奪われていく。歳を取れば誰しも障碍を背負う定め。他人事ではなく、未来の自分を介助する気持ちでいれば、自然と高齢者や障碍のある人々に支えの手を差し伸べる気持ちが生まれるはず。

この世界の私達皆に等しく開かれる明日に向かって、さあ、その

優しい手をしなやかに伸ばしてみませんか？

（塾講師）

人間杖

近藤和子

私はその昔、数十年間、義母である姑の介護をした。

当時、広辞苑にも「介護」という言葉はなかった。自宅でお世話するのが一般的で全て嫁である私が義母の面倒をみた。

あの時代は義母に対しては、絶対的服従だった。ヘルパーさんいないし、今程、便利な福祉用具もない。私は無給の無休の労働者であった。介護する時計に今日も針がないそんな毎日だった。

でも年月が経つにつれ、平成へと時代が移り、私も還暦を半ば過ぎた頃、

『何べん言うたらわかるん…』

段々と嫁の私の方が優位になってきた。

居間の私は米寿、あの時の義母の年齢を遙かに超えてしまった。

この年を迎えてはじめて義母の気持ち、心境がよくわかる。あの時の侮蔑の言葉がとても悔やまれる。

高齢になった私が昨今思い感じることー

私はやはり、一年ごとに段々と物事ができなくなっている。物忘れも多い。

いつ「認知症」と診断されてもおかしくはない年齢だ。覚悟はできている。

もしも私が「徘徊」して事故に遭ったなら家族は「どうして目を離してしまったのだろう」と自責の念に縛られるだろう。

しかし徘徊する認知症の人の安全は、家族がいくら頑張っても守

りきれない。家族だけでは防げないはずだ。事故は、認知症患者だけでなく、誰にでも起きる可能性がある。

だからこそ、その実態を知って問題を共有する意義がある。患者本人と家族、そして地域、行政、警察の理解と協力が不可欠だと思う。

ある日、私は市で「認知症サポーター」というパンフレットを見た。

それは認知症を理解し、認知症の人や家族を支援する応援者のことだった。具体的には様子が気になる徘徊と思われる高齢者を街で見かけたら声をかけるということだ。

「徘徊を 声かけで守る 地域の日、

サポーターの心の叫びは「一声かけることで老いと孤独に灯をともす」と言うことか?! 多くの人に関心をもってもらい、未然に徘徊事故を防ごうということだろう…。

サポーターの目印は、腕にオレンジリング腕時計のようにつけた人だ。

私は、このリングを「命の輪」と思い、サポーターは「人間杖」と把握し、理解をしている。

でも私は、認知症と診断された時点で患者本人が腕に「ID リング」(入院した際、腕時計のように患者 ID バーコードを腕に巻き付けたもの) 身につける方が、合理的で至便性に思えてならない。

それにより、例えば警察で保護された患者が ID リングによって、プロフィールが全て把握できるというわけだ。

オレンジリングでサポーター、ID リングで患者。並行して同時に実施できれば、徘徊防止対策としては強化になると思う。

益々、少子高齢化社会だ。徘徊に悩む家族は益々増え続けるだろう。だからこそ地域で守る、支える人が必須だ。

家族に認知症を患った人がいるならば、決して隠したり、抱え込

んだりしないことだ。

老化は誰もが避けられない。必ずやってくる。何も恥じることではない。

私の女学校時代、祖母が

『あんたもいつかは年寄りになるんやー。このおばはんのようになあ…』

当時は、何気なく聞いてはいたが、その言葉が脳裏に焼きついて
いる。

老いた人が、ある日今までのその人と違っていたとしても、どうかそのままその人自身のことを理解してほしい。

いづれ足が衰えて立ち上がることが困難になることもある。歯が
もろくなり、飲み込むことさえもできなくなるかもしれない。思わず、
下着に漏らしたりもするだろう。何度も同じことを聞いては忘
れたりと…。

介護者はイラダチで当然だろう。

でもどうかその人の手を握って理解する心、支える心をもってほ
しい。

きっとそれだけで、高齢者、障がい者は穏やかな気分になれる。
リラックスもできよう。自然と微笑みがでる。

母親が、我が子誕生した時、赤ん坊に寄り添ったように、今度は
母の人生の終止符に少しだけ付き合ってもらいたいと願うのです。
旅立ち前の準備している母に、あなたの貴重な時間を少しだけくだ
さいな…。

全て受け入れて自分の人生にしていく?! それは「神の聖域」だ
から…。誰もが望むことなく、私も間違っていると思う。ごく
自然体でいこう。

キーポイントは、地域の守り、支え。

患者と家族が安心して暮らせる社会づくり、考える機会になればいい。

人生の下山を目指す

矢矧秀司

登山を始めて 50 年になります、先日久し振りに大分の九重山に登ってみました。九州本土最高峰の山で、母が元気な頃はよく一緒に上った思い出の山でもあります。今回驚いたのは昔と比べて山ガールならぬ山グランニーの多さでした。

そして昨今超高齢化社会といいながら元気なお年寄りが増えたものだと感心させられました。

私が山に足を踏み入れた切っ掛けは、小学校 2 年生の誕生日に母からプレゼントされた「日本マナスル登山隊」の本でした。エイトサウザンダーと呼ばれる 8 千メートル級のグレートサミッツの一つで標高 8,163 メートル、1956 年に日本隊が初登頂を成し遂げた山です。

高校時代は山岳部で体力作りと技術を学び、大学時代は 2 千メートル級の山々にアタックする一方で、夏季休暇を利用して地域の子供会や児童養護施設の子供達に山登りやキャンプの楽しさを体験させて来ました。その際彼等に教えた最も大切なことは如何に安全に下山するかと言う事でした。

「人生は山登りと同じ、私は今下山中、つまり玄冬の時期を迎えてる、下りも大切、上りでは見えなかった素晴らしい景色もよく見えるでしょ」そう言ってくれた母が認知症と判断されたのが 86 歳でした。

鍋の焦げ、下着の汚れ、ボタンの掛け違い、そして化粧をしなく

なり、あれだけ達筆だった文字が書けなくなるなど症状は急速に進行していきました。

そして部屋での転倒を切っ掛けに歩く事さえ出来なくなったのが89歳の時でした。

母と二人暮らしの私には介護と仕事を両立させる厳しい生活が待ち受けていましたが、施設に入所させようとは思わず、週三日程度のデイケアサービスを利用し、出来る限りそばに付き添って下山させようと決心しました。

食事、排泄、着替え、入浴、会話、私が母にしてやれる事全てを感謝の気持ちに代えて取り組みました。

ある程度の栄養学も学びカロリー計算も出来た私は、1週間の献立表を作るなど、日々の食事のメニューに気を配り、上手く咀嚼も出来なくなった母の為に調理をする日々を続けました。

会話も途絶え介護用ベッドに横たわり、後僅かで人生を下り終える母が時折見せる笑顔を見る度に涙が止め処なく流れ落ちました。床擦れ防止の為、体位の変更も定期的に行うなど気を配っていたにも関わらず、次第に症状は悪化、加えて嚥下機能の低下による誤嚥の疑いが出たのが94歳の3月でした。

病院で誤嚥性肺炎と診断され入院、胃瘻と経管栄養の二者選択を迫られた時に私はこう言いました「よく頑張ったね、もうすぐだよ、綺麗な身体には傷は付けないから安心して。」

毎日病室に通い手足のマッサージとワンウェイの会話を1時間以上繰り返しました。ICレコーダーで好きだった曲を聞かせ、パソコンを使って好きだった映画も見せました。

栄養の吸収が殆ど出来なくなった時点で母の到達点である我が家に連れ帰ったのが二か月後でした。

「お帰りなさい、帰って来たよ」母の眼は部屋を思い出している様にも見え、喜んでいる様にも見えました。

そして5日後の早朝、母は無事に人生の下山を成し遂げました。

私も人生の玄冬期真っ只中「下りが大切よ」この言葉通りにきちんと人生の下山を成し遂げる事が出来るかどうか、自問自答しながら日々歩み続けています。

超高齢者時代、老老介護、高齢者の交通事故、高齢者施設の不足、介護従事者の不足等々問題山積の日本、政府は憲法改正よりも優先して取り組むべき事を見誤っているのではないのでしょうか。

歩く事によって第二の心臓とも言われている脛脛の強化を行わなければ、早々と車椅子、寝たきり生活が訪れる事は間違いありません。日本が健康寿命世界一と言われる中で、寝たきり年数も世界一と決して自慢できるものではなく、又ある資料によると国民のおよそ三千万人以上が足に疾患を持っていると言われています。

私は母の介護を通して大変多くの事を学び、そして本当に介護の苦労を体験することが出来ました。これは私自身の一つの財産と言ってもよいでしょう。

家族で乗り越える

一 柳 博 之

私の娘は生まれつきの発達障害があり、高校二年生になる今でも、言葉というものを発することが出来ません。幼い頃、なかなか話すようにならなかった娘が、実は障害があると解った時、私はひどく落ち込みました。「どうしてうちの子が。何も特別なことなんて望んでいない、ごく普通の子であればそれで十分なのに」と。当時は毎日のように「明日話すようになるかもしれない」「きっといつか普通の子になってくれる」。そんな事をいつも思い、願っていました。

しかし、障害があると解って一年ほどで気持ちを切り替えたのです。話せなくてもいい、元気で生きてくれているのであればそれでいい、この子にはこの子なりの人生がある。自分は親として精一杯この子を見守ってやろう。と。しかし当然ながら仕事をしている私にとって、娘の世話をする時間はなかなか無く、その役割は妻に委ねていました。保育園までは近所だったものの、小学校以降は車で二十分ほどの養護学校に通う事になり、妻が毎日送り迎えをしてくれています。障害があると解ってから、もう十数年が経ちました。しかし、娘の娘なりの成長を感じる時、私はとても嬉しく思います。

娘は今でも言葉を発することはありません。しかし、こちらの言うことは理解出来る様になり、私がちょっとしたことを頼むと、ちゃんとやってくれるようになりました。妻が夕食を作っている時お茶を入れたり、食器を並べる事などをしますし、他の家事も手伝う

ほどです。もちろん、自分の身の周りのことは全て出来るようになりました。娘のそんな姿を見ると、例え障害があっても一人の人間として、それなりの進歩や成長があるのだと実感出来ることが、親としての何よりの喜びだと思います。

障害は生まれつきのもので誰のせいでもなく、ましてや本人には何の罪也没有せん。私は確かにそれが解った時はとてもショックでした。しかし、今では毎日元気な娘の姿を見るのが楽しみです、それだけで十分幸せだと思っています。仕事を終えて帰宅すると、娘の笑顔が一日の疲れを癒やしてくれるのです。幸い娘はいたって健康で、病気もめったにしませんし、表情は豊かでよく笑ってくれます。時として感情的になることもあるのですが、特に家族に手間をとらせることはありません。もちろん、自立は出来ていませんが、家族の言うことを理解するようになり、家の中では誰にも迷惑をかけずにいてくれる。これだけでも娘なりに本当によく頑張ったと思いますし、親としても嬉しい限りです。

これに関しては、妻の努力に感謝せずにはられません。将来にはもちろん不安はあります。このままでは一生自立することは出来ないのではないかと。しかし、私は自分が生きているうちは、親として出来る精一杯の事をしてやろう。とそれだけを考えています。例え返事がなくても、毎日必ず言葉を投げかけてやる。何かを頼んでそれに応えてくれたら、必ず「ありがとう」と言ってやる。本当にささいな事です。しかし、例えば言葉を発しなくても、本人は言われた言葉の意味を理解しているはずです。そして娘と接する時は、いつも笑顔で心掛けています。それも必ず伝わるはずだと信じて、娘は父親としての私のそんな気持ちをきっと解ってくれるだろうと思っています。

私の家は、四人家族で、娘の他に妻と兄である長男がいます。私が生きている間は精一杯見守ってやるつもりですが、その後の事は妻と長男に委ねるしかありません。長男はまだ学生ですが、いずれは「妹の事を頼む」と言うつもりです。私もそうですが、長男には自分の出来ることをやってあげてほしい。そう願っています。その長男はとても素直で優しい心の持ち主で、これは娘の障害と決して無関係ではない、と私は思います。幼い頃に妹の障害を認識することで、人に対する思いやりの大切さを彼なりに身に付けたのでしょうか。

娘の障害は息子の人格形成に大きな影響を与えたと私は思っています。長男は必ず妹の力になってくれると今から信じています。こうして家族が全員で力を合わせ、暖かく見守ってやれば、娘はそれを彼女なりに受け止め、そして理解と感謝をし、彼女なりの幸せな人生を送ってくれるのではないかと私はそう思い、そうなることを願っています。

支援の輪を広げよう

召 田 俊 雄

七十歳を契機に一念発起、知的障がい者の日常生活復帰を支援する宿泊ボランティアをやろうと決意、月に3、4泊を八年間続けてきた。

きっかけは。

あるボランティア研修会で隣に座った知的障がい者母の会会長と名乗る女性から、「力を貸していただけませんか。」「ホームヘルパーの資格をお持ちとお聞きしたので、ぜひ」と声を掛けられた。

突発の出来事が発生した時に、同伴が難しい知的障がい者を家族に代わって面倒を見て欲しいのです。という切り出しで、宿泊棟があるので夕・朝食の後片付けやベッドメイキング、部屋の掃除などを一緒にやりながら自立を促して欲しいというのである。

入浴がそのひとつにあって、衣服の脱着や整頓の仕方を指導していただきたいと説明された。宿泊棟の風呂は機械式の設備ではないので車いす利用者の時が大変だが、あなたなら力がありそうだから大丈夫でしょう。と尻を押された。

夜間の生活の面倒みは行政に頼ることが出来ないのだから父兄で自立管理を申し合わせ、交代で面倒を見ることにしているのだが、自分の子どものことだけで手一杯で突発時に引き受けてくれる人がなかなか見つからない。ついては是非力を貸して欲しいというのである。

対象になるのはおおむね二十歳以上の成年男子で、すぐには知的障がい者と見分けるのは困難な人たちばかりです。と説明された。

これからの人生は世の中にお返しをするためにある、そういう思いが話を聞いているうちに私の胸の中にふつふつと湧いてきた。

「途中で投げ出すわけにはいかないのでしょうか？」と女房からは難色を示されたが私の気持ちは変わることがなく、やる気満々でこのボランティア作業を引き受けることにした。

だが、いざ引き受けてみるとひとりで対応するのには難しいことが多々あることが分かり、とりわけ入浴介護には想像以上の困難が待ち受けていた。

はた目にはわずかと見える洗い場と湯船の間の段差がわずかではなく、その段差が邪魔になって簡単には湯船に入れることが出来ないのだ。

真っ裸になった私が先に湯船に入って障がい者を抱きかかえるのだが、お互いが濡れた身体でつるつる滑り、湯船に浸かるまでにへとへとになってしまうのだ。そのためあとの夕食の支度どころではなくなってしまう、その後の一連の予定が大幅に狂ってしまうのが通例になってしまった。

入浴介護に限らず力を求められる仕事は他にもあり、ご両親が年配の家庭の場合、言葉に言い表せないご苦労が毎日繰り返されているに違いない、とひしひしとを感じる様になった。

（これは簡単には投げ出せない。ご苦労されているご家族に少しでもお役に立たなければ）、迷いが出るときがあると、私は自分にそう言い聞かせた。

私の活動は単独でいわば貧者の一灯に過ぎないが、まわりに声をかけることで仲間を増やし、支援の輪を少しでも広げられないだろうかと考えるようになった。

たまたま私は、地域の親睦団体のまとめ役をしていたので自分の

体験を会員に伝え、同じ仕事ではなくともよいから出来る所からボランティア活動をやろうではないかと訴えることにした。

かつての企業戦士や子育てを終えた主婦たちをはじめ多くの会員が私の話に強い興味を示し、すぐにでもやろうではないかという話になった。

私が活動するきっかけとなった母の会会長に話を伝えると会長は身を乗り出し、「それは有り難い。すぐにでも」「施設が二ヶ所あり、とても手が回らないのです」と母の会が行政と共催する夏祭りを支援して欲しいと要望してきた。

「誰でも出来る身近なボランティア活動です。」「都合のつく時間だけでも結構ですから、是非参加して下さい」と展開すると、「よし、やろう」と続々手が挙がり、旧盆の一日、施設の庭に組み立てられた櫓の色とりどりの飾り付け、金魚すくい、ヨーヨー釣り、的当て、鈴虫販売、父兄の手作りの品販売等、20 余名が準備から後片付けまで汗だくになって役目を果たしてくれた。

盆踊りの輪が解け、会場の整理も済んでメンバーが一堂に会すると、「やりがいがあったなあ」と確かな手応えの声があちこちからあがった。

何よりの成果は知的障がい者の方たちと触れ合い、ご家族の皆様とも交流ができたことで、支援を差し伸べる機会は身近な場に転がっていると実感したことである。

「やればできる、この支援を毎年やろう」という意見が多数出て盛り上がり、芋掘り会、屋外パーティなどの行事にも支援の輪を広げて今日に至っている。

あ と が き

2017 年度第 19 回「豊かな福祉社会を創るために = あしたに向かって =」のエッセイ受賞作品集をお届けします。

平成の今から振り返って見ますと、昭和の時代にはわが国自身に重い責任のある戦争がありました。その後は日本自身が直接戦争に関わっていません。平和が続いていたと言う事です。穏やかに見える時代ではありますが、逆に課題が次々と浮き彫りになってきつつもあります。貧困状態にある子どもたちが増えて来ている問題や生活保護の受給者が増えている事、保護主義とも言われる歪んだ愛国主義の台頭、マイナーな人たちの人権が軽視される風潮、若年層の自死が他国に比べて多い事などです。国全体のエネルギーが衰えているからか、勢いのある時代にはおもてに出てこなかった弱い部分が見えるようになって来ました。

そう言う風潮に対して時代もそのありようを変えながら次のフェーズに向かう兆しがあります。一言でくくるなら「多様性が受容される社会」の出現です。平成より前の時代にはわが国では人と同じである事に価値が置かれていましたが、現在では同じエリアに外国人の方が当たり前に住んでいたり、障がいのある方が家を出てショッピングや旅行に出る事が当たり前になっているだけではなく、パラリンピックなどの世界的なイベントなどを通じて障がいがある特別な事ではないと受け取る人が増えて来ているなどしています。

今回の作品エッセイである「愛」は親が持つ内部障がいを取り上げています。また「心眼のピアニスト」には 90 歳を超えて視覚障がいがありながら孫のリードでピアノを弾く事になった女性の話が生き生きと書かれています。「へえ、こういう人生もあるんだ」と言う読後感は、多様性を受け入れる時代の流れに沿ったものであると思われます。豊かな福祉社会では、多様性を積極的に認め受け入れてゆくことが欠かせません。それには今までの社会の仕組みではカバーしきれない社会機能が求められます。「被災地に立って感じた事」では土砂に埋もれた家に一人で暮らしていたおじい様の体験を元にした作品ですが、過疎地では「食品スーパー」は機能しないし存在も出来ない事、村の人が「おじい様」を寄ってたかって大切にしたからこそ元の生活に近い形で暮らしが成り立っている事が著わされています。おじい様が人並みではないことと、村の人がそれを受け入れて自分の事としてとらえている姿です。これこそが多様性を受け入れているリアルな姿だともいえるのでしょう。

人と同じである事ではなく、自分固有の人生のあり方を選べる事。また人のそういう生き方を受け入れられる事が、明日に向かって作り上げられつつある福祉社会の構成員に求められることと言えるでしょう。

読者の次回への参加もお願いしつつ、あとがきとします。

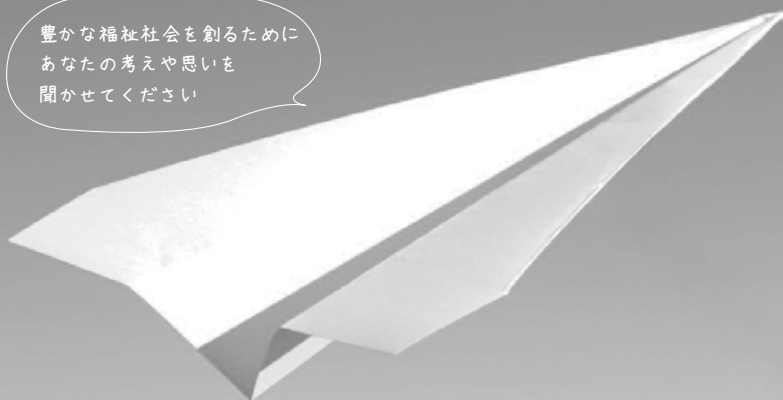
東京 YMCA 医療福祉専門学校
校長 八尾 勝

第19回 愛恵エッセイ募集

豊かな福祉社会を 創るために

あしたに向かって

豊かな福祉社会を創るために
あなたの考えや思いを
聞かせてください



応募方法

1. 応募締切 2017年11月13日(月)必着

2. 対象
- 1) 学生の部 中学生・高校生・短期大学生・
大学生・専門学校生など
 - 2) 専門職の部 高齢者及び障がい児・者
福祉施設等の職員の皆さん
及び在宅福祉現場で働く皆さん
 - 3) 一般の部 高齢者及び障がい児・者介護に関する
体験を持つ方は誰でも応募可能です。

3. 字数 1,600~2,000字

4. 体裁
- 1) 手書きの場合…400字詰めA4横書き原稿用紙を使用し、
読みやすい字で書く下さい。
 - 2) PC使用の場合…A4横書きで1ページを30字×26行に設定して下さい。

5. 表紙
- 1) 裏面のフォームをコピーし、必要事項を記入の上、
作品の表紙に添付して下さい。
(PC使用の場合、同様の内容を記載したものでも可)

6. 提出方法
- 1) 郵送…右記宛先へ郵送して下さい。
 - 2) メール…右記メールアドレスにご送付下さい。
その際メールのタイトルに「エッセイ応募」と必ず明記して下さい。
上記表紙の内容も一緒にご送付下さい。

7. その他 お一人1作品の応募に限ります。

賞

- 最優秀賞 各部1点……賞状と副賞(5万円)
優秀賞 各部3点……賞状と副賞(2万円)
佳作 若干名……賞状と副賞(1万円)

*受賞者の作品は「2017年度エッセイ集」に掲載されます。
(事務局にて誤字等の修正をする場合がございます。)

*後日、都内にて表彰式を行います。

応募された方に別途ご案内致します。

お預かりした個人情報は本目的以外には使用しません。

主催:公益財団法人 愛恵福祉支援財団
共催:公益財団法人 東京YMCA

問合せ・応募送付先

東京YMCA会員部内「エッセイ募集係」

〒135-0016 東京都江東区東陽2-2-20
TEL:03-3615-5568 FAX:03-3615-5578
E-Mail:kain@tokyoymca.org

“豊かな福祉社会を創るために”
— 2017 年度 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 —

2018 年 3 月 3 日 第 1 刷 発行

主 催	公益財団法人 愛恵福祉支援財団
共 催	公益財団法人 東京 YMCA
発 行 者	公益財団法人 愛恵福祉支援財団 〒114-0015 東京都北区中里 2 - 6 - 1 TEL 03-5961-9711 FAX 03-5961-9712
印 刷	アーク印刷株式会社 〒114-0024 東京都北区西ヶ原 3 - 66 - 9 TEL 03-3915-4240 FAX 03-3915-4212

非 売 品